

勝林寺報

「今日はお休みのお友達は無かったの。」「どんなお歌をうたつたの」など聞いても、全く無言。

80過ぎたこんなババーの言うことなんか、もう耳にも入らないんだ。仕方ないこつておりました。

私はあきらめて、こつちの間で繕い物をして仕方ないこつた。こんな歳にもなつて、実際なんの役にも立ちもせず、しわくちゃで汚いし。

なに言つても古臭いし、うるさがられいやがられても仕方ないこつた。うるさがられいやがられながらでも、孫たちとこうしてくらせるだけで、それでいいとしなければならんのですわー。

そんなことをおもいながら自分の仕事をしておりますと、突然、「おばあちゃん」とその孫が叫びます。

「なんだえ。なにかあつたの」。

「ううん。なんでもないよ。ただよんでもたかつただけ。」

わたしは途端に涙が出ちゃいました。

「そうかそうか。おばあちゃん、そこにいて、黙ってみていくてくれるだけでいいんだ。それで安心なんだって」。

「親」という字で親の値打ちを説いて下さった人がありました。

子供から孫から、なんの反応がなくとも、親というものは木の上に立って、自分の危険も省みないで子のこと孫のことを一心に見つめている、それが親と言う者。と教えていただいたことがありました。

此の孫は、ときには反抗的なことまで言うけれども、こちらのどこかでいのちのどこかで、この婆さんに寄り添つて大きくなつてくれるんでしよう。

たんき ほんき たんこりりん
たにしがコロコロないでいる。
たんき ほんき たんこりりん
からすがたにしをつついでる。
たんき ほんき たんこりりん
チンチン電車もやつてくる。
たんき ほんき たんこりりん
る皮革ま、つらつらしてゐる。

葬儀

〔法座終了後四時より
△同役員
△総代会・代議員
△出席ください

一月四日 川原町
中島ちよ子さま
七十九歳

二月九日 坪口

百六歲

春の彼岸会

○法座終了後四時より
○合同役員会
○総代会・代議員・仏壯仏婦役員
○出席ください。

二十六日 みのりを聞く会
二十九日 前坊守瞭 月十一回日
三十日 法事 中島ぬい様忌明法事
三十一日 あすなろ総会

3月のこよみ

前坊守さまのこと

晩、私たちの地区で勝林寺の門徒の寄り合いました。

今度此の地区の代議員をしていただく方が先日勝林寺であった代議員会の報告をなさいました。行事予定やら決算予算などやっこいはなしはわたしにはどうでもよいことで、眠いばかりでしたが、ただ、前の坊守さまの十三年のご法事が三月の春休みにおつとまりになると言うことをきいで、わたし、ほんとうに驚き、昨晩の集まりが終わってからも、いまもずっと、前の奥様のことばかり思い出しているのです。

わたしのこの地区は新興住宅地と書うので
しょうか、こんどの代議員さんも10年くら
いまえから田舎から引っ越して門徒に加わっ
たかたで、それで逆に坊守さまのことを持た
ちにおたずねになるのです。

実はわたしが、奥様には一番おせわになっ
たものですから、わたし思いだし思いだしな
がら、みなさんにおはなしさせていただきまし
た。

豊岡の病院に入院なさっていたころ。その
ころのことが一番わすれられないから、その
ころのことをおもにお話させていただきまし

あのころでも癌という病気は、なかなか本
人には知らされなかつたと思いますのに、奥
様は、「それはちゃんと知つていて、「わたし
癌だから」としつかりと納得したうえで療養
なさつておられました。

いろいろな癌の治療で、何回も髪の毛は抜
け、苦しいときがあつたはずなのに、奥様は
一度もそんな苦しい顔をなさつたことはあり
ません。病状きびしいときもいつもきれいに
身繕いしお化粧をしてにこやかに見舞いの私
たちを迎えてくださいました。

あの四年ほどのご入院のあいだが、いちば
んおしあわせそうにみました。

いのちあるがギリギ
いのちいっぽいに
生きゆがあと



毎日、朝と夕方ご院家さんは、おうちの水とお漬物とをもってお見舞いにかよわれておられました。奥様もどんなときもベットの上でいろいろな手芸をなさつて、私たちに見舞いに行くたびに「ありがとうがとう。お念佛よろこびましょうね」といつてプレゼントして下さいました。

ブローチやらなんやら、いまでも大切にわざしいただいております。

あんなきれいな病人つてわたしみたことがあります。なんな幸せそうな病人つて見たことありません。

わたしにとって、あのおかたは「みほとけさま」だったと、いまでも思っています。すくなくとも「お念佛をいただいているもの」のほんとうのすがたを、おのおくさまはわたしにおしえてくださったのだとおもつております。こうして話しているあいだにも、奥様のあのにこやかな顔がみえ、あたたかなお声がきこえて参ります。

その奥様の、はや13年のご法事が勤まるのです。感概無量ですネ。

三明院积瞭月

三月二十九日午前十時
☆おつとめ

童谷大學學長 神子上惠群様



共には是れ凡夫

一月二十一日は、聖徳太子さまのご命日とか。その日たまたま大阪へ旅行していましたので、四天王寺さまへお参りして始めて知つたことでございました。

ところが今はそうではない。アメリカもイランも、イスラエルもヨルダンも。みんな独りよがり。自分の国の利益だけ、自分の民族の正義だけを主張してやまない。これが西欧の人権の歴史からうみだされた悲しい結果では無いかとさえ思われます。

「本古来の文化も日本人の暮らしへ、昔は互いに許しあい認め合っていたと思われます。」

このお言葉は、十七条憲法のなかにある言葉ですが、いわば聖徳太子さまの「人間觀」を示した言葉です。

世の中には、偉い人、愚かな人、いろいろ
あらうけれども、お互い「共に凡夫」だよ。
俺は正しくて相手はみな悪いなどという自己
中心的な独りよがりが争いのもと。だれも同
じ愚かな心を抱き、だれも同じ悲しみを抱い
ている人間どうし、いたわりあい慰めあう中
で、はじめて平和があるの。「和を以て貴し
となす」。平和の根源を示されたことばであつ
て、太子さまが始められた日本文化のミナモ
トはここにあるということでした。

ところが、とくに明治以後、此のことが全
く忘れられ無視されているように私も思いま